

エイサーにみる青年会活動とその展開

与那嶺 江利子

I、はじめに

2000年7月15日、夜7時、沖縄市コリンザ。沖縄市青年団協議会主催の「エイサー写真展」の幕が開けた時、何故か感動で涙がでそうになった。「沖縄市のエイサーは、確実に、着実に青年会の手で受け継がれて、守られ、伝えられている」何の根拠もなく、そう感じたのだ。それが私の研究のはじまりだった。

沖縄市役所に就職して3回目の夏を迎えたその年、初めて担当する青年会の仕事に、期待よりもまず先に「私が担当で大丈夫なのか……迷惑をかけないだろうか……」という不安が私の心の大部分を占めていた。

そんな時、その逃げ腰な私の心を見透かしたように、ある青年から一言、「よなみねさん、ひとのために生きないとダメだよ」と、まるで「おはよう！」とか「また明日ね」とでも言うようにさらっと言われたのだ。その時からずっとその言葉が頭から離れなかった。

そして1年。2001年7月20日、夕方5時山形県米沢市。上杉鷹山フェスティバル。園田青年会の取材で訪れた会場で、遠く離れた東北の地でも、「心」「文化」は伝わるんだと、カチャーシーを踊りながら自分の中の沖縄の血を誇りに思った。

それから幾度となく青年会の取材を重ねるなかで、「エイサーはきっかけだね」と語る青年の言葉が、妙に心にひっかかって、「きっかけ……」ってどういうことなんだろう？ またしても私は悩んでしまったのだった。

この論文は、私が沖縄国際大学大学院に2003年3月に提出した修士論文を、縮小したものである。私が青年会とエイサーから学び得たものを、大学という研究機関以外にも、残して置きたくて、この『紀要 あやみや』に投稿させていただいた。エイサーのメッカとも言われるこの中部の人達の目にとまると同時に、何十年後かの読者に、2000年～2003年にかけての沖縄市のエイサーと青年達の様子を少しでも実感していただけたら幸いである。

II、研究目的

エイサー⁽¹⁾は、沖縄本島、周辺諸島の盆踊りと一般的に理解されている。その起源は『おもろさうし』⁽²⁾の流れを汲むものであるという説と、本土から流入した念仏踊りから来ているという説の2説に分かれている。エイサーの研究は、歴史や芸能、歌謡の側面からこれまでさまざまな研究が行われてきた。しかし、エイサーの担い手である青年または、社会組織としての青年会という側面から、その実態が明らかになっているとはいえないように思う。

エイサーは、地域の盆行事の芸能として、若者の集まりである青年会⁽³⁾により、祖先送りの

踊りとして沖縄本島、周辺離島の各地域で受け継がれてきた。戦後、青年の都市部への流出等により危機を迎えた時期もあったが、1956（昭和31）年、コザ市（現沖縄市）が「エイサーコンクール」⁽⁴⁾を開催するようになって、現在に至るまで、地域青年会を中心に盛り上げをみせてきた。また、エイサーのない地域の青年会が新たにエイサーを取り入れ定着させていく動きもみられる。

地域の人々に愛され、受け継がれてきたエイサーは、現在では、県内外で運動会や体育、総合的な学習の時間等教育現場に取り入れられる様になった。またさらに、行政内部においては、その踊り・文化的要素に着目して、観光資源として、各種イベント等、まちづくりのひとつの要素として導入されてきた。

また観光産業においては、「エイサー会館」のオープン（2002年1月）、「エイサーグッズ」（ビデオ、ハガキ、キーホルダー、衣装、太鼓等）の販売や「エイサー体験型観光」の売り出し等、「沖縄」を象徴するひとつの商品としてエイサーが注目をあびるようになってきた。

全国的に青年会の形骸化が叫ばれている中で、沖縄県沖縄市⁽⁵⁾の青年会においては、エイサーを青年会活動の中核的な要素として、活発に青年会活動が行われている。エイサーの担い手である青年会員が、エイサーを通じて青年活動を行う中で、地域社会との繋がりをどのように意識し、地域の中で自身の役割をどう確立していくのか、彼らの青年活動の実態を追いつつ、その中で青年個人の意識の変化をもたらすエイサーと青年活動の結びつきを本論文では主題の中心とする。つまり本論は、「エイサー」という踊り・文化的要素を核に青年組織がどう運営され、その集団の中で、各自のアイデンティティと地域意識がどのように確立されていくのか、沖縄県沖縄市青年会の事例を中心に考察を行うものである。

III、青年会組織とエイサー

森香織（横浜市立大学国際文学部地理学教室1999年度地域調査実習報告2000）の「エイサーの継承をめぐる青年会の状況」では、沖縄市のエイサーを取り上げ、青年会員の地域への帰属意識に注目し、それを維持発展させてきた青年会の状況や字意識を明らかにすると同時に、戦後のエイサーの新たな動きにも言及しながら、都市型の伝統芸能の現代的な意義について考察を深めた。その中でも、森は、近現代の青年会について以下の4点の視点からまとめている。

- ①戦後まもない青年会
- ②沖縄県青年団協議会の設立
- ③沖縄市青年団協議会の設立と再結成の経緯
- ④青年会の復活

①戦後まもない青年会⁽⁶⁾

全国的に戦前の自治会や青年団や婦人会は、国の政策の末端組織としてその方針の元に動いていた。戦後になり、沖縄の青年会は地域復興の担い手の中心として機能し、地域の産業振興、食料増産の一環として畑や耕作地を借り受けてサトウキビを作り、資金を捻出して活動や公共

物復興の寄付に充当したり、台風後の浸水した地域の後片付け、草刈りなどの奉仕作業も全員が力を併せて行った。現在は青年会参加を強制していないところがほとんどだが、当時は罰金制度があるなどして強制参加が一般的であった。しかし、かつての団員は「エイサー、陸上競技、交流会…と娯楽の少ない時代では楽しくてしょうがなかった」と振り返る（「広報おきなわ」1993・8）。このようにかつては地域と生活に密着した団体であったことが窺える。

1970年代に、当時、黒人街⁽⁷⁾とよばれた飲食街に近い安慶田青年会において青年活動を行っていた、現在50代の男性の話によると、「夜間に、女性が事件等にまきこまれないように、道に街灯をとりつける作業も青年会でやった」と言う。こういった地域の保安活動も、青年会が担っていたということから、青年会が地域社会に密着した団体であったことが窺える。

また、青年会は出会いの場でもあった。古くからの習慣であったモーアシビは、若者が都会へ流出し、道徳的にも良くないものとされたため、近代社会の波にのまれ次第になくなっていった。しかし、青年会活動が若い男女の出会いの場のひとつとなり、青年会で知り合った男女が結婚するエイサーニービチも見られるようになった。

②沖縄県青年団協議会の設立⁽⁸⁾

1948年に沖縄県青年団協議会（以下、沖青協と略す）の前身である沖縄青年連合会（1958年に改名）は結成された。当時全県的な組織は沖縄県婦人連合会と沖青協しかなく、60年代の祖国復帰運動において、多様化した青年運動、大衆運動の中心的役割を果たしていたのは沖青協であった。また、政治色が強い時代で、郡団の役員人事にも沖青協が関係していた。

沖青協が総力を挙げて取り組んだ運動をまとめると、第1に郷土復興と沖縄会館建設運動（53年1月竣工）、第2に祖国復帰運動、第3に35周年記念事業・沖縄県青年会館再建運動である。

沖縄県レベルでは沖青協においても、戦後の復興、そして祖国復帰運動というように、沖縄県の歴史にそった形で活動が展開されたのである。

③沖縄市青年団協議会設立と再結成の経緯⁽⁹⁾

1956年に「全島エイサーコンクール」が始まって以降、コザを中心とした中部の各青年会は互いに見栄えのする装束や太鼓の技を一層競いあうようになった。そして、その衝突の激化が、競い合いのない「まつり」形式へこのイベントを移行させた。全島エイサーまつりに移行したのは1975年の第11回大会からで、翌年には市内青年会の連携協調をはかる市青協が設立されている。したがって、1970年代は徐々に青年会同士が友好路線に進みはじめた時期といつてよい。

しかし、80年代になると、本土経済がバブル期を迎え、出稼ぎ者が増えたため、多くの地区でメンバーの確保ができず、また自治会と財政関係が問題となった字もあり、多くの青年会が活動の中断あるいはそれに類する状態であった。

1989年から1993年までは、市からの補助金50万円の予算を申請しておらず下りていない。1993年5月の時点で、市教育委員会では「地域青年会の衰退に伴い、役員体制が弱体化し、現在は『青年エイサーまつり』以外は事業の実施が行われておらず、その再建が各方面から求

められている」ことが指摘されている。

これが90年代になると一転した。地域意識の高まり、「エイサーがないとさみしい」と地域の声があがり、伝統芸能の見直しとともに、学校でエイサーが普及し定着していた。このようなことを背景に、各地で青年会が連鎖的に復活したのである。ここで、市内の青年会を繋ぐネットワークの必要性が高まり、いくつかの青年会の幹部達が有名無実であった（有名無実化していた？）当時の市青協に異議を唱えたのだ。復活当初の幹部が旧美里と旧コザの字を徹底的にまわって声をかけ、酒を酌み交わしながらリーダー同士の仲間づくりをした。これを糸口に活動の輪は広がり94年には一新した市青協が復活した。90年代前半に青年会復活を果たしている字が集中しており、その流れに載った形になる。ここに市青協を軸とし得る友好ネットワークの骨組みがつくられたことになる。

市青協に加盟していた字青年会は市内36字のうち1976年は26団体であったが、10年ほどで5団体に減少し、実質的な活動は停止した。1994年に18団体で復活し、平成14年度現在は、17団体が市青協に加盟している。会員は全体でおよそ、1,000名であるが、既存の2～3団体の加盟に努力しており、地域青年会の関心も高く年々増加の傾向にある。

平成14年度市青協加盟青年会（17団体）

胡屋、久保田、南桃原、安慶田、越來、室川、園田、山里、嘉間良、東、知花、美里、高原、山内、諸見里、登川、松本

市青協会則第1章第2条によると、「本会は各字青年会の連携協調を図り、その助長発展に努めるとともに『青年会』間の親睦交流を図りながら様々な活動を通して地域文化の発展と街づくりに貢献することを目的とする」とあり、エイサーには直接触れずに、青年会同士の交流と地域還元を謳っている。復活当初から市青協は、沖縄市内地域青年会を繋ぐパイプ役として重要な役割として存在している。

市青協の主な活動は、年に1度の総会に始まり、毎月第1火曜日の定例会、沖縄市青年まつり、クレイジーパーティー、青年リーダー宿泊研修会の開催、県内外の各種研修会への派遣やスポーツ交流活動を行っている。このように、市青協主催事業をはじめ、市の事業やイベントへの参加、県外を含めたエイサーの派遣事業など、市青協としても積極的に事業を展開している。また、平成13年度からは、市青協人材育成事業と称し、沖縄市教育委員会との共催により、パソコン研修を開催している。高度情報化社会に対応するため、青年会員個々人の資質向上を目的としたものだ。

このように、市青協は毎月第1火曜日の定例会の開催により、緊密にネットワークを維持している。定例会は、各青年会の会長または役員が集まり、エイサーシーズンであれば、沖縄全島エイサーまつりや、沖縄市青年まつり他、イベントの出演や県内外エイサー派遣などを行う。

特に全島エイサーまつりは、彼らにとって憧れの舞台であるのと同時に、前日の市青協主催の青年まつりの出演料が3万円なのに対して、全島エイサーまつりは30万円とその出演料の差やマスコミ等の取り上げ方も違ってくるので、どの青年会も毎年、全島エイサーまつり出演をひとつの目標に掲げているといえる。沖縄全島エイサーまつりの出演団体は、沖縄県全域か

ら沖縄全島エイサーまつり実行委員会により選考されるので、有力な青年会は頻繁に出演できても、歴史のない字にはなかなかチャンスがない。そこで、市青協で話し合う中で、公平な判断でレベルや優先権を考慮し、実行委員会へ調査票が提出される。

夏に限らず、まつりや催し物、各種イベント出演や、県内外のエイサー派遣の依頼を受けるので、市青協に加入することで、そのチャンスもめぐってくるので、そのような意味からも、市青協は地域青年会にとっての情報の要的存在となっている。

④青年会の復活⁽¹⁰⁾

前項で述べたように、90年代は各地で青年会が立て直された時期であった。復活の仕方は、地域をあげた大々的なものもあれば、サークルや保存会としてひっそり始めるケースと様々だ。しかし明らかに90年代は復活の年代であるといえる。何故なら、それまでは局地的にある字での復活であったり、断続的ですが途絶えてしまうものが多かったが、最近再生した青年会のいくつかは、数年で有力青年会と肩を並べるまでに成長しその勢力が維持されているからだ。

90年代に集中した理由については、まず、ずっと復活を望んでいた地域においてリーダーとなるべき人材が適齢になり、仲間や資金の工面などの他の条件がそろったこと。そして、隣にできたら「うちも欲しい、つくろう、つくろう！」と連鎖的に復活の風潮になったからのようである。

このように、森(2000)⁽¹¹⁾が整理したように、戦後、沖縄の青年会は地域復興の担い手の中心として機能し、エイサー、陸上競技会、交流会と娯楽の少ない時代では青年の交流の場として青年会は存在していた。

やがて、1956年に「全島エイサーコンクール」が始まって以降、各青年会は互いに装束や太鼓の技を競いあうようになり、1975年の第11回大会から「まつり」形式へ移行していった。まつり形式へ移行した翌年(1976年)には市内青年会の連携協調をはかる沖縄市青年団協議会が設立され1970年代は徐々に青年会同士がネットワークを築いていった。

しかし、80年代になると、本土経済がバブル期を迎え、出稼ぎ者が増えたため、多くの地区で参加メンバーの確保できず、多くの青年会が活動の中断あるいは、それに類する状態を会儀なくされた。

90年代になると、地域意識の高揚と、伝統芸能の見直しとともに、学校でエイサーが普及・定着、また本土における沖縄ブームとも合い重なり、各地で青年会が連鎖的に復活していった。90年代前半に青年会復活を果たしている青年会活動の輪の広がりを糸口に、1989年から活動停止していた市青協が1994年復活、友好ネットワークが築き上げられたのである。

Ⅳ、地域社会との関わり

本章においては、青年会と地域社会との関わりについて、諸見里青年会、胡屋青年会、園田青年会の3つの青年会活動の分析を行い、地域青年会が自治会行事やボランティア活動等の地

域活動と関わっている様子を提示したい。

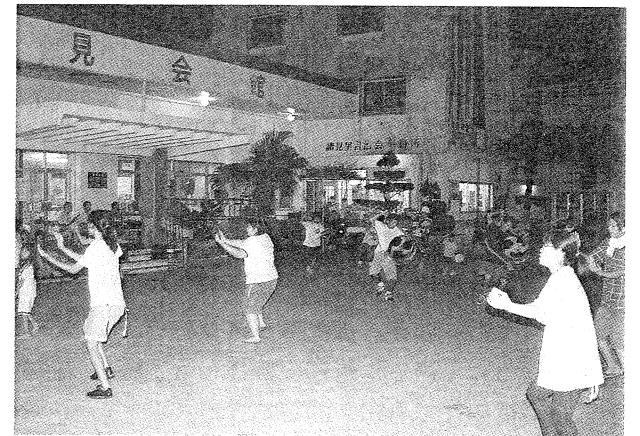
◆事例1 (諸見里青年会)

諸見里青年会の自治会行事との関わりについて、以下の平成14年度諸見里青年会総会資料、平成13年度活動報告から見てみよう。

6月・地域清掃、7月・沖縄市自治会対抗バレーボール大会、9月・旗すがしー⁽¹²⁾協力、10月・公園清掃、沖縄市陸上競技大会、12月・暴走族取り締まり、クリスマスパーティー、1月・沖縄市成人式典協力、自治会新年会協力等があげられる。12月のクリスマスパーティーでは、「出張サンタ」として、自治会内の家庭から事前に預かったクリスマスプレゼントを、クリスマス当日、青年会員がサンタクロースに変身し、家庭に届けるというものである。

また、活動表には現れてこないが、その他、自治会行事等でテント張りなど、力仕事を自治会から依頼されれば積極的に協力している。

諸見里自治会会長に話を聞いたところ、「青年会員のうち、行事に集まってくるのは、だいたい15名くらいだが、力仕事から、細かい準備や、清掃まで、非常に助かっていますよ」と青年会について語ってくれた。



2002/8 諸見里青年会エイサー練習風景

◆事例2 (胡屋青年会)

青年会を復活させて、2002年度で10年になる胡屋青年会であるが、その会の結束は強く、数年で有力青年会と肩を並べるまでに成長し、その勢力が維持されている。

胡屋自治会の会員に関わる行事にはすべて参加し、テント張りなどの会場設営の力仕事から、受付まで、与えられた役割をこなしている。また、自治会の役員研修にも、青年会の役員が参加し、自治会役員や婦人会、老人会との連携も図っている。

さらに、胡屋青少年育成協議会(以下、青少協)の主催である社会見学や餅つき大会にも参加し、社会見学では、班のリーダーとして青年会員がついて、子ども達と一緒に楽しんでいる。子ども達にとっては、青年会のお兄さん、お姉さんは憧れでもあり、親しみを感じるのであろう。復活当初から、現在のように、自治会行事に積極的に参加していたのか、胡屋の自治会長に尋ねると、「復活当初は、今ほど、青年会は(自治会行事に)参加していなかったけど、手伝ってくれた。青年会が盛んになるにつれて、自治会行事にも積極的に参加してくれたね」と話してくれた。

◆事例3 (園田青年会)

園田青年会は、特別養護老人ホーム「一条園」と「あいの村」の慰問活動を行っている。沖縄全島エイサーまつり出演前に必ず、毎年上記の両施設を慰問している。もう25年も続いているという。2002年9月1日の参加会員は、地謡3名、大太鼓3名、締太鼓15名、手踊り女14名、手踊り男4名、旗持ち1名、計40名であった。

また、園田青年会は、機会あるごとに、積極的に病院等のボランティア活動をおこなっている。2002年9月22日に訪れた



2002/9/22 エイサーでの慰問交流 (北谷病院)

た中山病院では、地謡1名、大太鼓3名、締太鼓4名、手踊り女10名、手踊り男1名、計19名で演舞した。中山病院は、現園田青年会副会長の前の勤め先ということで、その関係で依頼があったという。

踊り終わった青年会員に、老人ホームや病院で踊ることについての感想を聞いてみたところ、「おばあやおじい、喜んでくれるから、こっちも嬉しい」という感想を聞かせてくれた。最後は、踊る青年達も、観客の皆さんも、施設職員も、みんなでカチャーシーとなり、生き生きとした表情がとても印象的であった。

その他にも、園田青年会のホームページ上で青年会の活動報告を見ると、上記の2件の老人ホーム、病院でのボランティア慰問のほかに、2002年7月19日に国立沖縄病院と2002年8月16日に具志川記念病院にてエイサーが踊られている。

以上、3つの青年会員が地域社会に携わっていく様子を見てきたが、どの青年会も、自治会から、無理矢理お願いされたわけでもなく、「自発的に」自治会からの協力依頼を受け入れ、積極的に自治会行事や老人ホーム等の慰問活動を行っている。

エイサーによる慰問活動については、自分達が楽しんでやっているエイサーを踊ることで、ボランティアになるというのは、まさに一石二鳥のことである。

「エイサー」が地域に密着しているものを目指すのであれば、自治会活動に携わっていくことについても、自然な流れといえる。よく、沖縄市の地域の公民館に遊びにいくと、青年会員に会うことがあった。彼らは、自治会に何かお願いされたときはもちろん、集い憩いの場として公民館を利用している。

エイサーを行うために、青年会に加入する青年が、仲間と共にエイサーを行う中で、やがて地域意識に目覚め、エイサー以外の自治会活動への協力やボランティア活動へも積極的に参加するようになっていく。それは、戦前の青年会もかつてそうであったが、停滞と復活という青年会の歴史を繰り返しながらも、その時代の状況に併せて、青年会は地域社会の生活に密着してきたといえよう。

V、個人からみたエイサーと青年会活動

青年会員個人レベルの視点から、エイサーを行うようになったきっかけや仲間との繋がり、また地域社会に関わって行く様子などを明らかにしていくために個人に対して聞き取り調査を行った。この聞き取り調査は、改まった形で、インタビューを行ったわけではなく、話者が警戒心を抱かないように、祭り会場で、祭り打ち上げの席で、バスの移動中、旧盆練習の合間に、筆者が通年で参与観察を行う中で、質問を投げかけながら、それに答えていただいたものを、後日フィールドノートにまとめたものが、本節の基礎資料となっている。ここでは、3名の方の話を取り上げた。これらの基礎資料を用いて、一人ずつ体験内容の記述を行った。

各事例は、a、青年会とエイサーの練習に関すること、b、会長と役員体制について、c、青年会復活についてということに、それぞれ力点をおいて記述してある。いずれも、エイサーと青年全治動にどう関わり、どのような想いを抱いているかを明らかにしていくことを目的としている。

その際、話者の「語り」と筆者の「問いかけ」も取り入れながら、筆者なりに編集して記述を行った。本節では、こうして作成された各人の体験内容をまとめるかたちで考察を行いたい。ただし、あらかじめ、話者には、筆者の研究について、協力依頼は行っていることを付け足しておく。

〔a、青年会とエイサー練習〕

* T・Sさん⁽¹³⁾ (26才男・諸見里) 今年で12年目・大太鼓

T・Sさんは、14才の時から、エイサーを始めて、今年(2002年)で12年目となる。きっかけは、ずばり「好きだから」だと言う。自分がその年(15才)になったら、もちろん入るものと思っていた。その時県外に行っていたお兄さんが、「(T・Sさんは)中三だけど、お前、入っておけ」と言われて入会した。ほとんどの青年は、高校生から青年会に入るけど、入りたい人は中学生でも入れる。諸見里青年会の卒業は、29才までである。他の青年会は、30才を過ぎても踊りたい人は踊っているが、踊りたい年までという風にすると、20代後半からやめていく人もでてくるそうで、29才までという決まりは、あったほうがいいのではないかと考えている。

T・Sさんのころは、太鼓も手踊りも全部目で見て覚えたというが、ここ数年は、手とり足とり指導するようになったと言う。

筆者がT・Sさんと会話をしている際に、T・Sさんの友人が入ってきてエイサー練習について、以下のような会話が交わされた。

(T・Sさん) 俺なんかは、かっこよく見られたいと思うから、練習がんばるね。

(友人) 俺は早く終わらんかなーと思っている。

(T・Sさん) だから、上手くならんわけよー(笑)。

青年会に入会して、エイサーを踊るということは、「かっこいいから」というのもひとつの理由としてあげられる。また、エイサーと練習について聞いてみると、

(私) 練習量でエイサーの上手さって決まると思ってたけど、違うの？

(T・Sさん) ちがう。練習量はもちろんだけど、手足の運び方とかのセンスもあるね。あと、体力・持久力も関係してくるし……(同級生を指して) あれば、センスがあるね。体力はないけど(笑)。

との答えが返ってきた。

[b、会長と役員体制]

* T・Rさん⁽¹⁴⁾ (23才男・南桃原) 今年で5年目・大太鼓／地謡)

T・Rさんは、14才(中二)のとき、山内中学校30周年記念事業で踊ったのがエイサーをやるきっかけだったという。その時は、諸見里エイサーを踊った。それからエイサーを踊ってはいったけど、青年会をやっていたわけではない。だから、エイサー歴と青年会歴は違う。高二になって、「青年会やりたい」と南桃原の先輩Hさん(20年前に南桃原のエイサーが途絶えた時の最後の青年)に相談をもちかけた。Hさんには、「高校を卒業したら、自分なんかでやりなさい」と言われた。

そして、高校を卒業した年の4月に10名(大太鼓2名、締太鼓6名、手踊り2名)からのスタートとなった。その復活した年の道じゅねーの音響は、カセットテープだったそうだ。

T・Rさんは、三線をお父さんの影響で、小さい頃からやっていたのだけれども、「なんでやらんといけん」という思いで、いやいややっていたという。高三のとき、じん帯を切って、大太鼓が打てなくなって、再び三線を手にした。今では、地謡も担当するほどの腕前に成長している。また、毎週火曜日と金曜日は、10名ほどで、公民館で三線クラブで練習しているという。

5年前、10名からスタートした南桃原青年会は、現在の会員約60名に膨らんだ。南桃原の人が約半分。友達が友達を誘って、現在の人数にまでなった。兄弟で入っているのといとこ同士で入っているのが多い。T・Rさん自身は、ひとりっこで、

「ひとりっこだったからよかった。だから、青年会づくりたかった。青年会は、友達がいるから楽しい。好きだからやっているんだよ。」

と聞かせてくれた。南桃原青年会の役員体制は、会長1名、副会長2名、書記1名、会計1名の計5人。会長と副会長は3人同じ手帳を持ち歩いている。会長が、市青協からの情報をもってきて、ピーチリゾートに勤める副会長の1人が、リゾート関係から、イベントを持ってくる。それで、手帳とあわせて青年会の予定をたてていくのだ。会長として、60名の団員を率いていくことについて聞いてみた。

(私) 会長でつらいことはない？

(T・Rさん) いっぱいあるよ。でも一番つらいのは、上の人からは、「ちゃんとやれって」言われるし、したからは、「こうしたい」とか言われて、板ばさみになるのがつらい。会長でよかったことは、全島エイサーまつりに出場するとき、公民館のホールがいっぱいになって、あふれんばかりの熱気につつまれた。みんなが、ひとつになったこの時は、会長やってよかつ

たと思った。

自治会との協力関係については、結成当初から、自治会行事に積極的に参加するよう努力しているという。少しずつ、自治会との協力関係も築きつつある。

T・Rさんに、これから個人として、やりたいことを聞いてみると、

「子ども会をつくって、その子達に、エイサーや三線を教えたい。そうしたら、大きくなって青年会にはいるさーねー」

との答えが返ってきた。

[c、青年会の復活]

* T・Zさん⁽¹⁵⁾ (29才男・越来) 10年目・OB

T・Zさんは、16才の時に、越来青年会に入ったのだがその頃の青年会は、エイサー練習をやったり、やらなかったりだったし、上下関係も厳しかったという。越来エイサーをやりたくて、友達5人と一緒になって、先輩方・地域の人のところを「教えてください」とまわった。でも、その時には、あまり教えてもらえず、20歳の時、友達と一致団結し、「どうたーでやろう!」⁽¹⁶⁾と、試行錯誤の連続で越来エイサーを復活させた。

「いろいろな所で、先輩なんかから習ったって言っているけど、最後は、自分たちでやったよ。それで、旧盆にシママーイすると、地域の人が、あーじゃない、こーじゃないと言いはじめて……心の中では、教えてって言っても、教えなかったのにつて思ったけど、教えてくれるのは、受け入れたよ」

その時の地謡は、「Tに一さん」と呼ばれている人が、3日間、一人でやってくれた。衣装は、T・Zさんのお母さんの手作りで、ミシンでひとつひとつつくってくれたと言う。シママーイの時の食事も、T・Zさんのお母さんと妹2人が作ってくれた。太鼓は、城前自治会から、借りた。2年目になって、1年目の寄付金も集まったが、人数も増えて、太鼓は全然足りなかったという。城前自治会にまた、借りにいったけど、「1年目の寄付金があるでしょ」って借りることができなかった。最初のうちは、復活させた踊りに対して、シマの人もいろいろと口出したそうであるが、ある程度型ができてからは、何も言わなくなっていたという。

最初の年に、シママーイしたとき、地域の人に、(越来青年会に)「少年院の子が混じっているよ」って言われたことがきっかけで、越来青年会のメンバーがすぐわかるように、T・Zさんは、越来青年会のエイサーの衣装と同色の黄色いTシャツを作った。その当時は、「青年会を変えたい」という思いが強く、地域活動にも力を入れた。自治会行事に協力したり、老人ホームや学校を、ボランティアで積極的に自分たちから出かけていき、越来エイサーを踊った。一つの老人ホームから、評判が広がり、また出かけていって……という繰り返し。以前の青年会のように、酒飲んで、エイサーやって、やらない年もあってっていうのが、いやだったからがんばったという。

T・Zさんは、復活当初から会長として、会をたちあげ、青年会を引っ張ってきた。その苦労は並々ならぬものだっただろうと、想像できる。そのことについて質問してみた。

(私) でも、復活、そして会長って大変だったんじゃない？

(T・Zさん) うん、大変だったよ。会員 100 名いたから、みんながみんな、俺に言ってくるからね。氷がないとか、太鼓がどーだとか、苦情から何から何まで、俺一人にきよった。だから、Y (現越来青年会会長) には、楽しんでほしいと思っている。会長は、何かあった時にでいけばいい。

(私) なんで、今の会長に決めたの？

(T・Zさん) うん、Tとか、N (現同青年会副会長) も、いいけど、あの二人はあびやーあびやー⁽¹⁷⁾するほうだから、衝突してしまうと思ったわけ。Yには、冷静さがある。Yのもとに、副会長がいてちょうどいい。下からいろいろ言ってきたけど、副会長の二人が言うことは言うて。最後の決断は、会長が。ほんとに、自分が大変だった分、Yには楽しんでほしい。

(私) 16 才からこんなに苦労して復活させて今も頑張ってるこんなに続けられるのはなんで？

(T・Zさん) 好きだからかな。やっぱり。去年からは同級生と、シママーイの時のごはんつくっているよ、3 日間。あと年下の 10 代の子が、卒業して、「車さがしている」って言ったとき、自分の友達の手や一紹介したり、前に求人仕事していた時、青年会のメンバー、面接うけさせに行ったり、そんなのが嬉しい。

T・Zさんは、現在、越来自治会体育副部長として、自治会の集まりにも参加している。現越来自治会会長が、復活当初は、一緒にいろいろ回ってくれて、自治会長にもいろいろお世話になり、感謝していると言う。地謡も、現在は、T・Zさんの同級生メンバー数名が担当している。エイサーを踊り終わって、20 代前半から三線を始め、今では地謡を担当するようになった。大太鼓の衣装も黒から本来の黄色へ、そして白黒の縦縞脚絆に戻そうと思っているそうだ。

以上、3 人の事例を見てきたが、3 人ともエイサーをやるきっかけは、「好きだから」「やりたくて」と共通する。小さい頃から慣れ親しんできた、エイサーや三線が好きで、自分がその年齢になると、もちろんやるものだと思っていたという (T・Sさん)。

好きではじめたエイサーの技を上達させて、やがて「かっこよくみせたい」と思うようになる (T・Sさん)。エイサーが踊りである以上、その技を極めたい、かっこよくみせたいというのは、自然な流れであろう。

そうして、青年会活動が続けていくわけだが、共に活動が続けて行くうちに仲間意識が芽生えるようになる。

「ひとりっこだったからよかった。青年会つくりたかった。青年会は友達がいるから楽しい」

(T・Mさん) というように、仲間とともに活動するところに喜びを感じている。

一方、T・Zさんは、後輩に、車屋を紹介したり、仕事の面接を紹介したりと後輩の面倒をみるのが嬉しいと言う。両者ともに、エイサーに限らず、先輩・後輩を越えて、絆を深めて行く様子が窺えた。

さらに、T・MさんとT・Zさんは、地域社会へ目が向くようになる。T・Mさんは、青年会を始めた当初から、自治会に積極的に参加するように心がけていて、公民館で一人暮らしのお年寄りに対してエイサーを披露する自治会行事にその送迎から協力すると言うし、また今後は、子ども達に三線を教えたいと目標を掲げている。

T・Zさんも、以前の青年会のように、エイサーをやったりやらなかったりというのがいやだったから、学校現場へも積極的に出ていったし、老人ホーム等のボランティアのエイサーも積極的にいった。また現在は、越来自治会体育副部長を務め、自治会行事にも役員として参加している。

このように、エイサーが好きで青年会活動をはじめた個人が、しだいに仲間との絆を深め、やがては、地域活動にも目をむけるようになっていく様子を 3 人の話から、読みとることができた。

Ⅵ、青年会エイサーの新たな展開

1956 年コザ市主催による「全島エイサーコンクール」のはじまりをきっかけとして、各集落のエイサーが競って衣装・型・腕を磨き始めたことから、エイサーは、地域の芸能から大衆の芸能へ変化してきた。

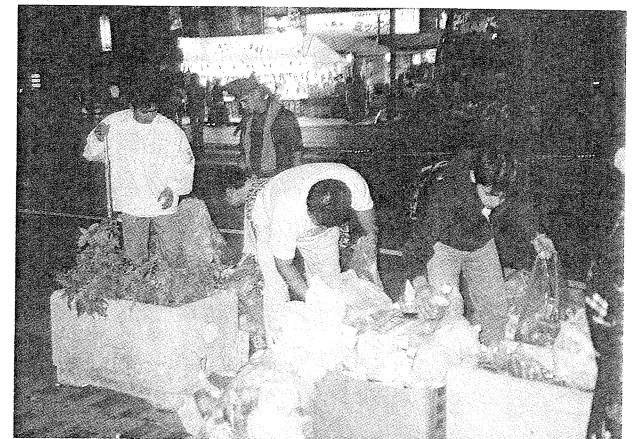
現在では、「琉球國祭り太鼓」に代表されるようにエイサーの要素を取り入れた「創作エイサー」「クラブチームエイサー」⁽¹⁸⁾とも呼ばれる集団も県内外に数多く存在する。また、「子どもエイサー」「婦人会エイサー」「県人会エイサー」「観光地エイサー」と各面で、エイサーがその団体の状況や環境に応じながら形を変えて踊られている。

また、旧盆の祖先送りという念仏踊りの意味合いが強かったエイサーが、2000 年には九州・沖縄サミットの首脳の出迎えセレモニーにも踊られ、現在、沖縄観光の要素のひとつとして注目も集めている。

(1) エイサー会館のオープン

前述した通り、また、近年の沖縄ブームの波にも乗り、エイサーの認知度は今や全国区となった。沖縄全島エイサーまつりの観客数も年々増え続け、2002 年第 47 回大会には、25 万人にも膨れ上がっている。⁽¹⁹⁾ また、県内へのイベントへの派遣も年々増え続け、2002 年度は沖縄市青年団協議会にきた依頼だけでも、7 件にも及んでいる。

地域に根ざし、地縁により結びついてきたエイサーが、沖縄市青年団協議会の発展に伴って、自発的に他地区の青年会と協力・団結し、それにとどまらず外部に向けて情報を発信し交流を推進してきたのである。そのような中、各青年会の相談・指導の役割を果たしている市青協の事務局長は、2001 年夏、沖縄市商工会議所が主催する「ドリームショップ」⁽²⁰⁾に



2002/11 沖縄国際カーニバル後の清掃

企画書を提出、みごとグランプリを獲得した。そして、エイサーの情報発信とトータルコーディネートを併せ、市青協の事務所的機能も担うことにもなる「エイサー会館」が、2002年2月21日沖縄市パルミラ通り⁽²¹⁾にオープンした。行政主導ではなく、各地域青年会のエイサーを尊重し、各青年会間のネットワークを築き上げることに成功している。

オープンして、11ヶ月の感想を、事務局長は、沖縄全島エイサーまつりが特集された2002年「広報おきなわ」12月号で、次のように語っている。

今年の1月にエイサー会館をオープンしたが、県外から熱狂的なファンがいるのは、知っていたが予想をはるかに上回る数に驚いたのは事実である。なぜなら、毎年夏はもちろん2ヶ月に1回のペースで沖縄（コザ）に遊びにというよりもユクリ⁽²²⁾にきたって感じが見受けられた。

エイサーだけって言うわけでもないが三線愛好家・ディアマンテス大好き人間と様々なナイチャーがエイサー会館に来るようになってきました。～中略～

エイサー会館をオープンしてからはかなりの県内外より取材を受けている中で、もっと資料を集め拡大するためには行政とタイアップしてより良いエイサー会館をつくっていききたい。

上記の事務局長の発言からも、県内外のエイサーファンが全国に拡大していることが窺える。そのような意味からも、エイサー会館は、沖縄を訪れる「沖縄ファン」または「エイサーファン」の需要にマッチした施設となっているといえるだろう。

またエイサー会館は、単に、エイサーの情報発信とトータルコーディネートの役割を果たす館としての観光施設ではなく、市青協事務局長を中心に、市内青年会にとって、各青年会間のネットワークを形成するための中心的な役割を果たしている。

しかし、ここ数年の間、エイサー関係の問い合わせ、エイサー県外派遣時のイベントの依頼先と青年会の調整等は、事務局長ほか市青協役員が担ってきた。事務局長の職場にまでその問い合わせがきたため、業務に支障をきたしたという。市青協としては、独自の事務所と専任事務局員の配置を市当局に望んでいるという。現在ある「エイサー会館」はあくまでも、「エイサー」がメインであって、市青協の事務局というのは、兼務であると認識している。

今後は、ドリームショップの副賞である1年間という家賃補助の期間が1月に終了したということと、今後、独自のグッズ販売やエイサーの派遣を含めて、「エイサー」をひとつの商品としていかに採算をあげていくか、市青協をどう運営していくのか等、NPO法人格の取得も視野に入れながら今後のあり方について模索している。

事務局長はまた、今後の市青協について、次のようにも語っている⁽²³⁾

継続・維持していくこと、青年会同士の交流を深めていく場にしたい。頑張ってここまで伸びてきた市青協を維持していくことができるか？　ここが、僕達の正念場で。僕達が伸びる所でもある。

(2) まちづくりへの活用

①エイサーシンポジウム

全国的にも認知度が高まっているエイサーについて、いま一度、その在り方や定義を考えて

みようという趣旨のもと、沖縄市青年団協議会が「エイサーシンポジウム」を、2002年7月30日、沖縄市民小劇場あしびなー⁽²⁴⁾において開催した。

沖縄市観光協会事務局次長の崎浜秀嗣さんをコーディネーターに、パネリストとして、沖縄市芸術監督の玉城満さん、沖縄全島エイサー祭りのテレビ解説者の比嘉常俊さん、琉球國祭り太鼓代表の目取眞武男さん、沖縄市青年団協議会事務局長の仲真良彦さんがこのシンポジウムに参加した。

冒頭から比嘉常俊さんを中心に、「チョンダラーは、本来なかった。下品なアカサナジャー⁽²⁵⁾は伝統と品位を汚すもの。やめてほしい」等、エイサーの演舞に加わるチョンダラーについての議論が展開されたが、ここでは、チョンダラーについての議論は省略し、「青年会エイサー」「伝統と継承」「創造」という本シンポジウムにおいて登場してきたキーワードに焦点をあててみたい。以下、翌々日8月1日に掲載された、沖縄タイムス、琉球新報、両紙の記事から、パネリスト各々の発言を見てみよう。

(フロア) 創作と伝統にどう線を引けばいいのか。

(目取眞) 伝統あってこそ新しい感動が生まれる。地域では伝統、外では新たなものというやり方も考えられるのではないか。

(玉城) 見る人が判断すればいい。伝統は保存会が守り、伝統的なものをどう踊っていくかに青年会の意義がある。

(フロア) マスコミが創作エイサーを伝統的なエイサーと紹介し、その認識が独り歩きしている。

(その他の指摘)

- ・地域の伝統行事の中のエイサーと祭りで踊られるエイサーなどを分けて考える必要性
- ・現在踊られている青年会エイサーの変遷の把握が必要⁽²⁶⁾。

(目取眞) 若者が何を求めているのか。何に感動するかを見極める必要がある。演技より友達ができることが大事だ。

(仲真) 青年会活動はエイサーだけではいけない。それ以外に二つぐらい、1年中友達でいられる仕掛けが必要。先輩だけでなく地域との交流も大事だし、環境も問題。住宅密集地では周囲に迷惑を掛けないう音響学を勉強する必要があるかも⁽²⁷⁾。

青年会のエイサーは、昔からの「型」や「踊り」を変えずに、継承されてきたわけではない。旧盆時の祖先を送る踊りということを基本に、踊りや衣装は、その時代時代によって絶えず変化し、各地域の青年によって踊られてきた。そのようなことを念頭におくと、青年会エイサーが「伝統」、琉球國祭り太鼓に代表される太鼓の集団のエイサーが「創作」という図式はあてはまらない。「創作」と「伝統」という言葉に惑わされてしまいがちだが、青年会のエイサーも絶えず変化してきたし、琉球國祭り太鼓も20年余りの歴史を積み重ねてきている。

上記のシンポジウムでも発言がでてきているように、青年会エイサーにしても琉球國祭り太鼓にしても、お互い「太鼓を打つ」「踊る」「舞う」という踊りそのもののスキルアップやその練習過程を楽しむのと同時に、お互いの仲間と共に時間を過ごすことによって得られる「共有

感」から、友達ができたこと、そのことが、両者の共通項であるとも言える。

このように、本シンポジウムでは、さまざまな角度からとらえられている「エイサー」を、その担い手自身である青年会自らが、整理しなおし、沖縄市の街づくりに関わってこういう一連の動きが、意義あるものだと思われた。

②ちゃんぶるートークバトル

前述のシンポジウムは、エイサーシーズンに入る前、7月に青年会主催により開催されたが、エイサーシーズンも一段落した2002年11月4日、今度は、沖縄市民小劇場あしびなーの主催により、「ちゃんぶるートークバトルわした芸能の行方 唄・三線・舞踊・芝居・エイサー まるごと討論」と題した討論会が、沖縄市民小劇場あしびなーで開かれた。このトークバトルは、「国際文化観光都市」を掲げる沖縄市が、民謡、琉球古典音楽、ロックなど、それぞれのジャンルから、沖縄の芸能について本音で話し合おうと、企画したもので、沖縄市芸術監督の玉城満さんをコーディネーターに、県ロック協会事務局長の喜屋武幸雄さん、県立芸大助教授の久万田晋さん、俳優の高安六郎さん、音楽プロデューサーの知名定男さん、野村流師範の比嘉常俊さんら5人のパネリストが、これからの芸能のあり方などについて意見を交わした。

このトークバトルでは、激動の時代を迎えている沖縄の音楽、舞踊、芝居など沖縄の芸能全般について話し合われたが、その中でも特に、エイサーについての部分を抜粋してみよう。

(玉城) 青年会エイサー、県人会エイサー、太鼓エイサー、創作エイサー、クラブチームエイサー、婦人会エイサー、老人会エイサー、子ども会エイサー、運動会エイサー、コラボレーションエイサー、などなど。今では、さまざまなジャンルのエイサーがあって、同じレベルでは語れない。それぞれ、整理し、分類していく時期にきている。その上で、青年会エイサーはどうか、琉球國祭り太鼓はどうか……と考えていく必要があるのではないか。

(知名) 昔は、エイサーは盆にしかなかった。その時に、同級生と再会できる。エネルギーを発散する場所、まさに「青春」の一言につきる。それがエイサー。1年に1度祖先が帰ってくるし、いとことも会うことができる。肝ドンドンですよ。

エイサーは、エンターティメントとしては、昇華していくもので、パフォーマンスもあっていいと思う。非常に結構。また、歴史や儀式性、地域性を活かした平敷屋、屋慶名エイサーなど、今は広がっていく段階。その根っこの部分に何があるかが大事。自信をもって行えば、金にもなる。

(久万田) 毛遊びが廃止され、青年団が打ち込んできたのが、エイサー。伝統を守るのと同時に、新しいスタイルの追求も、その時代時代で行ってきた。一般に「創作エイサー」と呼ばれているエイサーを、私は、「クラブチームエイサー」と呼んでいる。今まで、それぞれの青年会のスタイルで、葛藤があり、議論が行われてきてきた。エイサーに今の太太鼓が取り入れられるようになってきたのもここ50年にしかない。太鼓のないエイサーがあってもいいし、そのコンクールだってあってよい。それぞれいろんな価値がある。それぞれのスタイルで、「俺たちはこれでいこう」と決めていってもいいのではないか。

(比嘉) ～チョンダラー廃止論～省略～

エイサーの本来持っている、スピリッツは、忘れるな。その上で、エンターティメント性が広がっていく。

玉城さん、知名さん、久万田さん、比嘉さん4人とも、旧盆時だけに踊られていたエイサーが、戦後、その踊りそのものに注目が注がれるようになって、県人会や子ども会、そして久万田さんが言うように、クラブチーム、一種のサークルとして、太鼓や踊りが創作され、楽しめるようになってきたことに着目している。そのグループグループによって、エイサーについて整理・分類する必要性を玉城さんは主張しているし、知名さんにしても、その地域性・歴史性を踏まえてエイサーは昇華していくものととらえている。

4名ともに、大事なのが、それぞれの団体が話し合いの中から独自のスタイルを築き上げていくということであると主張している。参加者の言葉を借りると「根っこの部分」「スピリット」を忘れることなく、エイサーを踊る意味というのをそれぞれの団体自身で位置付け、独自のスタイルを築き上げていくこそ重要である。一口で「エイサー」と言うけれども、「エイサー」団体の数だけ、「エイサー」のスタイルが存在すると言えるのかもしれない。

③沖縄市エイサー教え隊

「エイサー教え隊」は、エイサーを県外で広め、県内への観光誘客にもつなげようと、沖縄市観光協会が、市内の青年会のメンバーをエイサー指導員として本土に派遣する事業である。

青年会はこれまでも、独自のルートで東京や大阪ほか、県外の地域と交流を図り、エイサーの指導を行ってきたが、同事業は修学旅行などでエイサーを見たり、体験した中高校から学校行事で発表したいので指導にきてほしいという要望が多いのを受けて、沖縄市観光協会が、宿泊旅費などを助成、財政的に支援しようというものである。

平成14年度は、7月に園田青年会が山形県米沢市へ、また11月に諸見里青年会が東京都町田市へそれぞれ22名派遣された。7月の園田青年会は、地元の小中学生でつくる上郷エイサークラブを指導し、その後子供たちは、7月20日に米沢市で開かれた上杉鷹山公誕生祭に出演した。また、諸見里青年会は、町田市のエイサーグループ「青海波」のメンバーへ諸見里エイサーを指導した。

伝統芸能としてのエイサーを正しく伝えることに加え、その魅力を広めることで、市内への夏の観光客誘致を促進させることがねらいである。

今年度、派遣された山形県米沢市と園田青年会、東京都町田市と諸見里青年会は、2つとも派遣される前から縁あって交流を推進している地域で、本事業が今回活用されることとなった。今後、派遣された先々で、エイサーの指導者がエイサーを習得し、その指導者を中心にエイサーが根付いていくことが期待されている。エイサー人口が増えることによって、ゆくゆくは、沖縄市に訪れるきっかけになること、指導した青年会とその地域の市民レベルの交流が推進されることが今後期待される。

(3) 観光産業での展開

①全国エイサー道じゅねー

沖縄祖国復帰 30 周年事業として 2002 年（平成 14 年度）に実施された「全国エイサー道じゅねー」は、東京をはじめとする 15 都市で、92 万 2750 人の観客を動員し、大きな関心を集めた。

この事業は、エイサーを演じる県内各青年会を軸とする観光キャラバン隊を全国の 15 都市に派遣し、繁華街の街頭において、エイサーなどの芸能公演、観光物産展を行なうものである。沖縄県祖国復帰 30 周年の節目において、沖縄が新たな世紀を切り開く飛躍のスタートとなるよう、特に、基幹産業としての観光の振興を図るべく、沖縄と直行便を結んでいる全国の各主要都市において、全国的な観光キャンペーンを展開し、沖縄の特性、沖縄観光の魅力を全国にアピールするのを事業目的とした。沖縄を代表する伝統芸能である「エイサー」の公演を軸に観光物産展を開催し、また、百貨店等で開催される「大沖縄展」と連携しながら、観光と物産による相乗効果を図って、沖縄を PR した。表 2 は、そのスケジュールである。

沖縄市青年会からも、札幌へ越来青年会、広島へ登川青年会、東京へ胡屋青年会、そして福岡へ園田青年会が参加した。

沖縄市青年団協議会の事務局長仲真さんも「県外派遣は、一人一人の貴重な体験。自分がやっているエイサーについての“気づき”がもらえる場所だ」と言う。また、全国エイサー道じゅねーの手ごたえについて、「県人会はもちろんのこと、沖縄好きが多いのが分かった。僕が、知っている範囲で、旧盆や全島（沖縄全島エイサーまつり）で再会した人は、100 人近くにもなる。エイサーは夏シーズンなので、コザにまた遊びにきたいと思う人を増やしたい。全国のエイサーファンが多いということが、今回分かった」と言うように全国エイサー道じゅねーによって得られた観光客誘客効果を述べている。

しかし、県外派遣にでかける日程は、概ね 3 泊 4 日。その間、青年会員は、仕事を休むのに苦労しているという。「職場で、エイサーで県外に行くとは、言いだせなくて、体調不良で休んで、TV に出て、怒られるっていうのもあったね。」今後も、エイサーの県外派遣がますます増えていくとするならば、社会的にも、「エイサーの担い手が観光立県としての沖縄県に一役買っている」という認知度が高まって欲しいと関係者は願っている。

②沖縄市エイサーマンズリー

2002 年、沖縄市においては、沖縄市商業活性化エイサー実行委員会という組織が立ち上がり、「エイサーマンズリー」という企画が実施された。これは、「エイサーのメッカ沖縄市としてどうイニシアティブをとるか」という問いから、エイサーファンや観光客が確実にエイサーを楽しめるように約 1 ヶ月間、週末エイサーを見せることによってエイサーファンの拡大や沖縄市の入域観光客数の増大を意図した。そのことにより、沖縄市への経済波及効果が生まれ、商店街やホテル、地域の活性化を図ることを目的としたのである。沖縄市商業活性化エイサー実行委員会は、沖縄市一番街商店街振興組合長を実行委員長に、センター商店街振興組合、サンシティ商店街振興組合、パルミラ通り会、胡屋地区商業地域活性化研究会の各長が委員を務

めた。また、事務局は、沖縄市観光協会、沖縄市青年団協議会が担った。2002 年 7 月から 9 月にかけてのイベント日程は次の表 3 の通りである。

沖縄市商業活性化実行委員会を立ち上げ、エイサーマンズリーと銘打っての開催は初の試みだった。実行委員会に加入している通り会や商店街の横の連携を図りながら、「この時期に沖縄市に来ると必ずエイサーが見られる」というしくみをつくることにより、確実に沖縄市に滞在型の観光客が訪れることを次年度以降期待したい。青年会のメンバー達は、その「エイサーの担い手」であると同時に、市青協という連合レベルで、このような市の街づくりに参画しつつある。

③リゾートホテルでの演舞

毎年沖縄には、数多くの修学旅行生が季節を問わず訪れるが、この修学旅行にも、エイサーを披露する機会が近年増えてきている。旅行社が意図的に、「エイサー体験」を取り入れる場合や、学校の先生の要望で取り入れる場合もある。

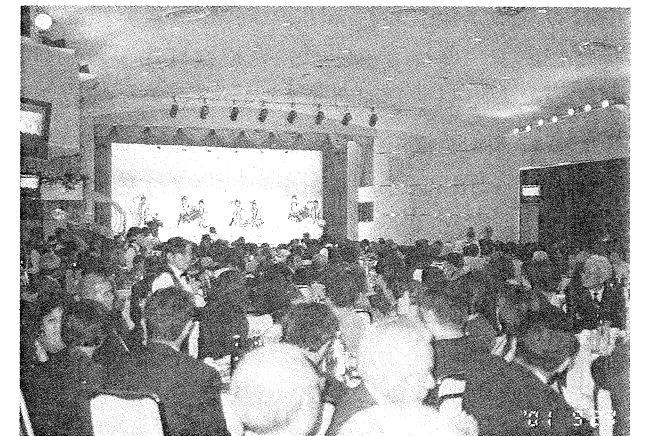
沖縄市南桃原青年会の場合、副会長の一人が恩納村北部にあるホテルムーンビーチに勤めているということもあって、本土の旅行者とのパイプが存在する。まず、旅行社からオファーがあった時点で、会長、副会長 2 名の、計 3 名で、青年会のスケジュールを確認後、依頼を受ける受けないを決定する。その後、依頼を受けることになった場合、会長、副会長は、メンバーの確保、青年会メンバーの足となるバスの確保や旅行者との踊る場所等の確認が行われる。

一つの事例として、2003 年 1 月 14 日に行われた神戸市立神港高等学校の修学旅行での演舞の流れを追ってみよう。

この日の南桃原青年会のメンバーは、チョンダラー 1 名、地謡 3 名、大太鼓 3 名、締太鼓 10 名、女性手踊り 4 名、計 21 名。市教育委員会のバスを借用しての移動となった。神港高校の修学旅行生は約 360 名。彼らの宿泊先は、沖縄市より車で約 1 時間北上した恩納村のかりゆしビーチリゾートである。夕食後の 19 時 50 分から「エイサー体験」と銘打って、南桃原エイサーの披露、体験がスタートした。

まずはじめに、チョンダラーが登場した後、チョンダラー自ら、エイサーについての概要を簡単に説明。地謡、大太鼓、締太鼓、手踊りがそれぞれ紹介しながら登場した後、南桃原エイサー 2 曲が披露された。そして会場から、生徒、先生何名かに登場してもらって、実際に太鼓を持って、エイサーを体験してもらう。

1 回で体験できるのは、360 名中の数名なので、太鼓を何度か交代しながら曲を流して体験、というのが約 30 分間行われた。体験が終わって、再び 9 曲南桃原エイサーを披露し、最後は、



2001/9/23 結婚式でのエイサー

簡単にカチャーシー⁽²⁸⁾のレクチャーをした後、全員でカチャーシーを踊って、約1時間のプログラムは終了した。その後、青年会と高校生が記念撮影をする場面が見られた。

神港高校の校長先生は、「同じ10代の子たちが、ああいう風に踊るのを見て、羨ましかったんじゃないですかね。生徒たちの、いい刺激になってくれれば」とエイサー体験の感想を述べてくれた。一方、生徒達は、「はじめてみたけど、おもしろかった」と言葉少なに感想を聞かせてくれたが、一生懸命に、南桃原青年会のメンバーと写真を撮ろうとする様子からは、初めて見たエイサーに感動を覚えたことを伺うことができた。

一方、青年会のメンバーは、このような形で踊るエイサーを、青年会活動の資金を集めるための営業活動のひとつと捉えている。自分達の持っているエイサーを見てもらうことで、謝礼をもらい、また、エイサーシーズン以外に集うことにより、各々の親睦も深めている。バスの車内でもわきあいあいとしてとても楽しそうだったのが印象的だった。また、ホテルから、南桃原公民館に戻ってきて、弁当を食べながら、その日の反省会を行った。その日は、夜10時頃に公民館に戻ってきたが、その日演舞に参加できなかったメンバーも、仕事が終わって、公民館に集まってきて、反省会の輪に加わっていた。

このようなリゾートホテルや修学旅行生を前にしての演舞は、南桃原青年会の場合年に5～6回あるという。エイサーのオフシーズンの月1回のペースだ。青年会は、通常旧盆、沖縄全島エイサー祭りが終了し、地域の慰労会が終了したのちは、オフシーズンに突入し、お互いが集う頻度は自然と少なくなってくる。このような中で、上記のような、依頼があると自然に青年会のメンバー同士が顔を合わせる機会が増え、よりいっそう仲間としてのお互いの絆が深まっていくような感を受けた。

(4) 県外派遣と外部との組織的交流

青年会における市内エイサーイベントの主な活動内容は、「市青年エイサーまつり」の開催、「全島エイサーまつり」への出演、「国際カーニバル」「土着人フェスタ」等で、今やエイサーはイベントの集客においては、なくてはならない存在である。

また、「2000年九州沖縄サミット」やNHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」の効果による近年の沖縄ブームの波にも乗り、エイサーの県外への派遣イベントは年々増え続け、平成14年度4月～11月の間で、次の表4の7件にもおよんでいる。

また、ここ2～3年の間には、市青協の各青年会同士の連携・ネットワークの強化を図ったこともあり、自治会の枠を越えて、近隣の青年会が数ヵ所集い、それぞれに地域に根ざしたイベントを立ち上げてきた。

●「かりゆしエイサーまつり」…登川地域 2000年～

●「風山祭」…山内地域 2000年～

●「越来中エイサーのタベ」…越来地域 2000年

●「エイサーフェスティバル in コザ」…諸見百軒通り近辺地域 2001年

この節では、地域の芸能であった「エイサー」が、青年達の手によって外部で踊られていく様子を県外派遣の事例を例に見ていきたい。

①新宿エイサーまつり

「新宿通りに沖縄がやってくる」をテーマに、東京都新宿で、7月27日「2002新宿エイサー祭り」が開催された。沖縄市胡屋青年会、糸満市喜屋武青年会や、琉球國祭り太鼓、東京都世田谷区立明正小学校の4、5年生ら総勢約300人のエイサーチームが新宿通りを練り歩いた。

この祭りは、「新宿は危うい」というイメージを一掃し、エイサーのような活気のある街づくりを目指そうと、新宿駅商店街が昨年9月に開いたものである。きっかけは、新宿で沖縄そば店を経営する東嵩純さんが、琉球國祭り太鼓のメンバーを招き、エイサーを披露したことがきっかけだった。新宿の商店街の人々が初めて見るエイサーに魅せられ、「新宿のイベントにしたい」と東嵩純さんに話を持ちかけた。

今年は、新宿大通り、新宿東口、新宿歌舞伎町も加わり4商店街で実行委員会を組織し開催した。同実行委員会では、来年以降も開催していくことで意見が一致し、今年を第1回に位置づけた。今年の開催は、県主催の復帰30周年行事「全国エイサー道じゅねー」との共同開催となった。

将来は、「浅草のサンバカーニバル」「大銀座まつり」や「東京阿波踊り」に匹敵するイベントにし、「新宿の名物」として定着させたいとしている。

②広島エイサー琉風会と登川青年会

「広島エイサー琉風会」は、広島県にあるエイサーを踊るグループのひとつで、2001年6月、「広島エイサー地謡の会」が名前を改め、スタートした。「琉球の風を広島で吹かせたい」という思いからこの名前がつけられた。「琉球の風、それは、平和を願い命を大切に作る心です。太鼓と三線と唄によって、広島発の沖縄旋風を巻き起こしたい」と代表は、発足時の会の通信にて語っている。

現在、毎週金曜日の定例会（定例練習）に約30～50名（登録は100名以上）の人数が参加し、また、おのおので自主練と称し、練習を重ねている。5月25日～26日に行なわれた「全国エイサー道じゅねー」をきっかけに、練習参加者が増加してきた。また、エイサーの演舞については、まつり会場やデパート、福祉施設等、エイサーを披露する機会は多い。

前節に述べた全国エイサー道じゅねー時には、登川青年会が、広島を訪れた。その際、チラシやうちわ等の観光パンフレットの配布、道じゅねーの旗もち、交通整理等の、登川青年会の演舞の際にスタッフとしてボランティアで参加してくれたのが、広島エイサー琉風会のメンバーと広島沖縄県人会の皆さんである。道じゅねーの手伝いだけでなく、盛大な歓迎会も催してくださった。

その縁あって、広島エイサー琉風会と登川青年会の交流は深まり、2002年の旧盆時には、広島エイサー琉風会のメンバー約20名が沖縄を訪れた。その一部は、ウークイ時にも、登川地域に足を運び、登川のシマまわりを見学し、最後、深夜に及ぶ登川青年会の打ち上げにも参加し、交流を深めた。登川青年会のメンバーは、「今度はまた広島にスノボーしに来てね」と声をかけられ、交流が益々深まっていった。

このように、県外派遣をきっかけとして県外との交流もふえ、再び沖縄にて再会するといっ

た事例が多く見受けられる。沖縄の青年会にとっても、県外のエイサーをやっているグループにとってもお互いの情報交換を行うのと同時に、親睦が深まり、やがて友好関係が深まっていくのである。

③東京都町田市と沖縄市青年会の交流

ア、町田市と沖縄市との関わり

町田市と沖縄市の関わりは、前新川市長時代、全国でも有数の福祉の町の先進地として、沖縄市が行政視察に訪れたのがきっかけだった。その時、沖縄市側の職員が町田市側へ、沖縄の伝統芸能「エイサー」を紹介した。そしてその年 1995 年、町田市の当時の商工観光課課長、部長が共に、「沖縄市全島エイサーまつり」を訪れたという。「エイサー」を初めて目にした町田市商工観光課のみなさんは、

「ぜひ、このエイサーを町田市に呼ぼう」という話になり、翌年 1996 年胡屋青年会エイサーを「第 10 回フェスタまちだ」に招待し、町田市でのエイサー演舞が始まったのである。



2002/7/26 町田エイサー祭り

イ、「フェスタまちだ 2002・町田エイサー祭り」の概要

今年 2002 年で「フェスタまちだ」も第 16 回を数える。今年のキャッチフレーズは、ずばり「イチャリバチョーデー」。第 14 回のフェスタからは、「エイサー祭り」も併せて開催され、まさに沖縄・エイサー色を打ち出した祭りとなりつつある。エイサー祭りとしては今年度で第 3 回目を数えた。

この沖縄からのエイサー招待は、1996 年の胡屋青年会を皮切りに、1997 年登川青年会、1998 年諸見里青年会、1999 年園田青年会 2000 年胡屋青年会（2 回目）、2001 年久保田青年会、そして今年、諸見里青年会（2 回目）の招待にいたった。現在では、エイサーもすっかり町田市民に浸透した模様だ。

この「フェスタまちだ」は、町田市あげての大きなイベント・祭りで、“踊りのふれあい”と銘打ったメイン会場ステージでは、本場沖縄のエイサーが見られるだけでなく、地元・町田市のエイサー「青海波（せいかいは）」、「琉（りゅう）」の演舞、和光鶴川小学校、桐朋小学校の子供エイサー、そして近隣のエイサーグループの東京エイサーシンカ、鶴見エイサー潮風、横田西多摩エイサー太鼓、琉球エイサー会、宇座エイサー神奈川クラブと 10 のエイサーを見ることができる。また、エイサーだけでなく、「よさこいそーらん踊り」の地元グループ「ぞっこん町田'98」、「踊り屋 1 Z E N」が鳴子踊りのパフォーマンスを披露するほか、「町田市民吹奏楽団」、「琉球空手」、「手話ダンス」、「レクリエーションダンス」、「和太鼓」、「テコンドー」、

「ヒップホップダンス」、「琉球舞踊」、「アフリカドラム」等のステージを見ることができる。

メイン会場ステージを中心に、商店街の中に 4 つの特設会場があり、そこでも上記の演舞を見ることができるほか、商店街をエイサー・鳴子踊りが練り歩く「道じゅねー」も行われる。今年の「フェスタまちだ 2002」には、約 30 万人もの人が訪れたという。

ウ、町田市のエイサー団体と沖縄市青年会の交流

「フェスタまちだ」に本市の青年会エイサーが招待されたのをきっかけとして、町田市にも、エイサーのグループをつくろうという動きがでてきた。その取り組みの中心となったのが、「町田市」と「町田市青年経営者研究会」である。現在では、「町田エイサー後援会」という組織が中心となって、町田市におけるエイサーグループを支援している。胡屋青年会に指導を受けて発足したのが「町田 琉」（現在の登録会員数約 120 人、実際即踊れるメンバー 60 人程）である。「町田 琉」は、エイサーを中心として、その他御神輿・飲み会・旅行・各種イベントを通して、祭り好きな若者を集めて楽しもうという会である。入会資格は、高校生以上 30 代までで、何にでも一生懸命取り組みのできる祭り好きな人となっている。（ただし、エイサーに関しては、女子は手踊りのみ）

一方、「青海波」（現在約 50 人）は、年齢制限なし、エイサーパートの制限もない。子供から高齢者まで、好きなパートでエイサーを楽しもうという会である。

若いメンバー構成の「琉」、家族的な雰囲気の「青海波」といった印象を受けた。お互い競合することなく、交流も行っているということだった。

◆「青海波」と「諸見里青年会」

「青海波」は、発足当初、諸見里青年会のビデオを見て、振付・踊りを覚えたという。その後、1998 年諸見里青年会が町田市を訪れた時に、直接振付・踊りの指導を受けた。今年、諸見里青年会が訪れた際は、98 年に訪れたメンバーと青海波のメンバーが再会するシーンを見ることができた。青海波のメンバーは、2 日目の晩、居酒屋にて、諸見里青年会の歓迎会を催してくださった。お互いのメンバーが会話する様子は、昔からの友人同士の様で、ほのぼのとした光景であった。

◆「町田 琉」と「胡屋青年会」

胡屋青年会からエイサーの指導を受けたのがきっかけで胡屋青年会と「町田琉」の交流が始まった。エイサーがきっかけでお互い同士が友達になり、個々人でも沖縄ー東京の往来を繰り返すようになる。琉のメンバーが沖縄に来た時は、エイサーの指導を行いながら、または泡盛を飲みながら、お互いの親交を深めていった。また、町田琉の発足当初からの中心的な存在であったメンバーが、町田市で沖縄料理店「うみんちゅ」を開店させた時に、仕入れ等で手伝いをしたのが胡屋青年会のメンバーであった。ちなみにこの「うみんちゅ」は今では町田琉メンバーの交流の場所となっている。

それから、今年度、沖縄県祖国復帰 30 周年事業「全国エイサー道じゅねー」で胡屋青年会が新宿でエイサーを披露したときには、町田琉のメンバーが、数名、胡屋青年会の衣装を身に

まとい胡屋青年会のエイサーを披露した。また、ビデオの撮影、交通整理などの手伝いもしてくれた。また、胡屋青年会のメンバーは、新宿到着1日目の空いたスケジュールを利用して、新宿から約1時間かけて町田市まで足をのびした。その日はちょうど、玉川の街の祭りの日にあたり、「町田 琉」がエイサーを披露していたのだ。私もその時、同行していたのだが、「町田 琉」の演舞に「胡屋青年会」が飛び込みで、自然に合流した時にはある種の感動を覚えた。エイサーという文化要素により、地域差を超え、瞬時に、市民レベルの交流が行われる。町田琉と胡屋青年会のメンバーの本当にいきいきとした表情が印象的だった。

そして、8月21日。旧盆ウンケーの日。胡屋公民館には、胡屋青年会のメンバーが旧盆の道じゅねーをするため、集まっていた。その中に、町田琉のメンバーも3人ほど、胡屋青年会の衣装を身につけ、自然に混じっていた。胡屋の地域の人達も「〇〇ちゃん、またきたね〜。今度はいつまでいるのう？」と声をかける。その琉メンバーもまた「おばさん、またきたよー。〇日までいるよー」と自然に答えていた。

また、この夏、町田琉でエイサーを踊っていたメンバーが2人沖縄市に移住し、胡屋青年会で胡屋青年会として始めてエイサーを踊った。エイサーが一段落した10月、「今年、胡屋青年会で踊ってどうだった？」と尋ねてみたら、「楽しかった！ 向こうで踊るのは、見ている人（ここでは胡屋の地域の人）がちがうし、（旧盆の）道じゅねーが楽しかったね」と嬉しそうに感想を述べてくれた。

前記の町田市の例で言うならば、7年前までほとんど知られていなかった「エイサー」という文化が、「まちだフェスタ」という祭りをきっかけとして、町田市全体に発信することができたのである。今や、町田市の域を超え、近隣都市にまでその波紋がひろがっている。と同時に、沖縄市青年会のメンバーは、町田市へ招待されそこで演舞することにより、改めて「エイサー」を含めた自分たちの生活文化を見つめ直すことができたであろう。時には、町田市民に「エイサー」について尋ねられたかもしれない。そんな時に、いつも何気なく踊っている「エイサー」のことを再確認するだろう。また、沖縄市・沖縄県を代表して町田市に招待されているという緊張感と責任を感じながら、県外派遣へ出向くことは、個々人の成長にもつながっていくのではないか。

「エイサー」という文化要素をきっかけに、沖縄市青年会と町田市民が、行政と行政という枠にとらわれることなく、市民一人一人のレベルで文化交流を行なっている。エイサーを始めたとした沖縄の誇る歌、三線、舞踊、などの芸能は、時代と空間を超え、演じる人だけではなく、観客を含めてそこにいる人たちを一つにする力をも持っている。だからこそ、生活背景の違う市民と市民を結びつけることができるのではないか。

(5) 若干のまとめと考察

今では、沖縄市のイベントにエイサーが踊られないことはないと言っても過言ではないほど、私たちの目に触れることが多くなってきているエイサーであるが、沖縄市においては、エイサーシンポジウム、トークバトルの開催等まちづくりの要素として公の場で話し合われるようになってきたことは近年の動きであると言える。また、それと平行して、エイサー教え隊の指

導者派遣やエイサーマンスリーの設定等、沖縄市観光協会を中心に「エイサー」を要素に観光事業を展開しようという動きも活発化してきた。そして、「エイサー」に関する情報発信と更にグッズや派遣調整等トータル的にプロデュースを行うことを目的として「エイサー会館」がオープンした。更に、先に取り上げた「新宿エイサーまつり」や「町田エイサーまつり」の事例のように、沖縄県以外での認知度も高まり、県外からの招聘事業も増してきた。また、2002年は、沖縄本土復帰30周年事業「全国エイサー道じゅねー」も大々的に展開され、沖縄県としても県を代表する芸能のひとつ、観光要素の目玉として、県外へ沖縄をアピールする手段として使われた。

その担い手である青年会員ひとりひとは「シマで踊るのが一番楽しい」と語る一方で、結婚式やイベントでの演舞、さらに、県外派遣等、仲間と共に過ごす時間を楽しみながらも、自己表現のひとつの手段として、エイサーを踊っている。

また、市の連合組織である市青協においては、地域青年会が市青協という枠組みの中で、市のイベントに運営協力したり、ゴミ拾い等のボランティア、市の成人式の運営等、街づくりに積極的に携わるようになってきた。一方で、お互いの情報交換の中から、自分達の地域青年会の取り組みや運営について他の青年会を参考にしたり、悩みを共有したりと、お互いの交流の中から、地域を越えた市のネットワークを形成することに成功した。

地域の芸能として、閉ざされた空間で踊られていたエイサーが、地域の枠を越えて、個人と個人というレベルで交流が図られ、また、組織と組織というレベルで、ネットワークが形成されていった。その中で、青年会エイサーの担い手個人としては、自己を表現する場としてエイサーを踊り、また仲間と交流を図りながら、地域活動を行うことにより、自己実現を図っていったといえるのではないだろうか。

Ⅶ、まとめ

本論は、「エイサー」という踊り・文化的要素を核に、青年会組織がどう運営され、その集団の中で、エイサーの担い手自身である青年自身のアイデンティティと地域意識がどのように確立されていくのか、沖縄県沖縄市青年会の事例を中心に考察を行った。

第Ⅱ章において、森香織（2000）の「エイサーの継承をめぐる青年会の状況」と照らし合わせながら、戦後、停滞と復活を繰り返しながらも、その時代の状況にあわせて、青年会活動が行われてきた状況と、かつて、地域社会の中で青年会がどのように位置付けられていたのかを整理した。

戦後の青年会は、地域の産業復興や食料増産、草刈りなどの奉仕作業も全員で力を合わせて行い、地域活動の要であった。また、娯楽のない時代では、エイサー、陸上競技大会、交流会と青年達の交流の場であり、地域と生活に密着した団体であった。

1950年代になって、エイサー大会、結婚式の余興、祭り、イベント等、旧盆行事以外で踊られることが増加し、外部から注目されるようになってくる。そして、1956年、コザ市にお

いて「全島エイサーコンクール」が開始されると、各青年会は互いに見栄えのする衣装や太鼓の技を競いあうようになったのである。

1960年代～70年代は、沖縄が政治的に揺れ動いた時期でもあり、祖国復帰運動等、政治的運動が行われた時期でもあった。また、1977年、エイサーコンクールは、コンクールという制度が廃止され、まつり形式へ移行した。

1976年に市青協に26団体加盟していた市内青年会も、1980年代になると、バブル経済期による出稼ぎの増加のため、参加メンバーが確保できず、多くの青年会が活動の中断を余儀なくされた。そして、1989年には、市青協も市に対して、補助金の申請を行っておらず、市内青年会の連合組織としての市青協も、実質活動を停止した。

しかし、1990年代になると、字への帰属意識が高まり、人の移動（県外への出稼ぎ）、メディアの影響、外向けの祭りにより本土から注目されるようになりエイサーが伝統芸能として社会で再評価されたのである。そのこともあって、地域での復興熱が高まり、地域青年会が復活、再生し、その流れに乗り、1994年、市青協も18団体で復活した。ここに新たな市内青年会のネットワークの土台が作りあげられた。

そして2000年になって、九州・沖縄サミット、NHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」等再び「沖縄」がメディアでとりあげられるようになって、「エイサー」も注目をあびるようになってきた。市青協役員の努力もあって、県外派遣が増加するのと同時に、地域青年会間、県外の団体とも交流が増え、市青協を軸とした強固なネットワークが作りあげられた。そして、エイサーの情報発信とトータルコーディネートを併せ、市青協の事務所的機能も担うことにもなる「エイサー会館」が、2002年1月20日沖縄市バルミラ通りにオープンした。以上、戦後から、現在までの青年会活動とエイサーについて概観した。

第Ⅳ章と第Ⅴ章では、各地域青年会という団体の視点と、青年会員個人レベルの視点からの分析を行った。エイサーを行うために、青年会に加入する青年が、仲間と共にエイサーを行う中で、やがて地域意識に目覚め、エイサー以外の地域活動やボランティア活動に携わっていく様子は、今も昔も変わらない。しかし、青年会によるエイサーは、「字のもの」という意識をもちながらも、字外の会員の増加、派遣、旧盆外のイベント、またメディアの影響等、その体制や活動も時代の状況に即して変化してきた。

2003年現在、全国的に青年会の形骸化が叫ばれている中で、沖縄県沖縄市の青年会においては、エイサーを青年会活動の中核的な要素として、活発に青年会活動が行われている。エイサーの担い手である青年会員が、仲間とそのエイサーに関わる時間を共有する中で、やがて仲間意識が芽生え、新たな地域意識が生まれてきた。

エイサーコンクールに象徴される1950年代、地縁による結びつきを指向する「字アイデンティティ」⁽²⁹⁾を共有していた青年会が、現在は、約半数の会員が地域外であるという状況の中で、新たに地縁の枠をとりはらった形で「青年会」というブランドが再生された。その中で青年は、自分自身の字ではないながらも、その「青年会」という場所でその仲間とともに、夏にはエイサーを行い、またその自治会で行われる行事に協力し、共に青春の時間を過ごしている。

本論は、エイサーと青年会活動の実態を追いつつ、その中で青年個人の意識の変化をもたら

すエイサーと青年会活動の結びつきを主題としてきたが、「エイサー」を通して、青年会を調査する中で、「エイサー」という要素を軸に、実にさまざまな方面へ「エイサー」が波及している状況を目の当たりにしてきた。最後に、今後に残された課題を提示し、本論を結ぶたい。

本論では、触れることができなかったが、エイサーは、県外においては県人会を中心に、また純粋にエイサーが好きという団体が、グループをつくり、踊られている。その範囲は、日本全国にとどまらず、アメリカ・ブラジル・ハワイ等海外にもその活動は展開されている。また、沖縄県内においても、学校教育の中で、また子ども会や婦人会で、大学で、サークルで取り入れられ、エイサーに関する新しい動きが展開されている。それらの状況も含めて、総括的にエイサーを把握することが、今後の青年会エイサーの活動においても必要になってくるであろう。

また、エイサーのない地域の青年会が、新たにエイサーを取り入れ、定着させていく動きも見られる。その子弟関係を明らかにすることも今後の課題としたい。

さらに、観光人類学の視点から、エイサーと観光という視点で分析すること、また社会学の視点から、メディアで扱われるエイサー、象徴されるエイサーを取り上げることも、沖縄の社会文化を分析する手がかりのひとつになると思われる。

「エイサー」は、その踊り手、地謡、観客を含めて、その場に居合わせるすべての人々に感動を与え、心を一つに結びつけることができる力を持っている。各地域青年会は、青年会活動を行う中で、会員同士の絆を深めるのと同時に、市内・市外・さらに県外との交流から、新たな青年会活動を生み出してきた。また、自発的に他地域の青年会と協力・団結し、お互いの青年会を時にはライバル視しながら共に成長し、時には尊重しながら、各青年会間のネットワークを構築している。

また、彼らはエイサーを通して、積極的に地域活動や街づくりに目を向けるようになったのである。彼らにとっての収穫は、個人としての成長と、「わったーシマ」と愛着を込めて呼ぶことのできる「青年会」という居場所の発見、さらに、彼らの一番の宝物は、一生涯通じての仲間ができたことに違いない。

Ⅷ、終わりに

沖縄ブームに相まって「エイサー」は県内外のマスコミから注目を集め、また歌謡や芸能といった側面からの研究も盛んだ。その「エイサー」の魅力とは何なのか、なぜ、人の心を惹きつけてやまないのか、私は考えた。

エイサーの魅力は、歌・三線や踊りの素晴らしさはもちろん、エイサーを通して、その土地と人とが結びついている所にもあるのではないかと。旧盆に祖先をお送りする。先輩方と共にその地域の自治会行事に協力するなどして地域づくりに参加する。仲間と楽しく過ごす。家族・友達を大切にする。近所の子ども達をかわいがる。先輩を敬う。そんなシンプルな人間・社会関係を、青年会のメンバーは、さらっと自然にやっていたのだ。その事に気づいた時、私は「エイサー」に惹き付けられていたのではなくて、「エイサーを踊る彼ら」をととても好きで、心から尊敬していると実感したのだった。

まつりを運営する後姿や、仲間と交わす笑顔、メンバーを怒る顔、全島エイサー祭り初出場のはりつめているけれどすがすがしい緊張感、シマで踊る姿、イベント後にゴミ拾いをする、老人ホームで楽しそうに踊る姿。自治会の行事に参加すること。そこから確認する自分自身の存在。そんなことを書きたいと思った。

「シマでエイサーを踊るのが一番楽しい」と青年が語るように、それぞれの地域の思いと誇りをエイサーの曲に乗せて踊る瞬間、それは踊り手と地域の人、そして祖先と自分自身、さらに未来の子孫へも繋がる瞬間と言えるのかもしれない。

ありがとう。たくさんのことを教えてくれた沖縄市の青年会の人々とエイサーに関わるすべての人に感謝します。

そして、私の論文を快く受け入れてくれた沖縄市立郷土博物館の皆さんに心から感謝致します。ありがとうございました。

参考文献

- * 琉球新報社編 1984 『沖縄大衆芸能 エイサー入門』 琉球出版社
- * 宜保榮次郎 1997 『エイサー沖縄の盆踊り』 那覇出版社
- * 大城学・松田米雄編 儀保榮次郎編 1998 『エイサーエイサー』
- * 沖縄県文化環境部文化国際局文化振興課 沖縄市企画部平和文化振興課編 1998 『エイサー三六〇度 歴史と現在』 沖縄全島エイサーまつり実行委員会
- * 平山和彦 1978 『青年集団史研究序説（上・下巻）』 新泉社
- * 小林香代 2001 『演者たちの「共同体」』 風間書房
- * 山下晋司編 1996 『観光人類学』 新曜社
- * 橋本和也 1999 『観光人類学の戦略』 世界思想社
- * 祝宮静他編集 1969 『日本民俗資料辞典』 文化庁文化財保護部監修
- * 福田アジオ他編集 2000 『日本民俗大辞典（上・下巻）』 吉川弘文館
- * 瀬川清子 1969 『沖縄の婚姻』 岩崎美術社
- * 北河賢三 2000 『戦後の出発』 青木書店
- * 沖縄タイムス社編 1983 『沖縄大百貨事典』 沖縄タイムス社
- * 池宮正治 1998 「エイサーの歴史」『エイサー三六〇度 歴史と現在』 沖縄全島エイサーまつり実行委員会
- * 小林幸男 1998 「エイサーの分類」『エイサー三六〇度 歴史と現在』 沖縄全島エイサーまつり実行委員会
- * 岡本純也 1998 「エイサーの展開」『エイサー三六〇度 歴史と現在』 沖縄全島エイサーまつり実行委員会
- * 池宮正治 1990 「エイサー芸能と念仏歌」『沖縄の遊行芸—チョンダラーとニンブチャー』 ひるぎ社
- * 島尻勝太郎 1978 「ニンブチャー 民間念仏者」『沖縄の外来宗教』 窪徳忠編 弘文堂
- * 島尻勝太郎 1980 『近世沖縄の社会と宗教』 三一書房
- * 知名定寛 1994 「念仏とエイサー」『沖縄宗教史の研究』 榕樹社
- * 森香織 2000 「エイサーの継承をめぐる青年会の状況」『沖縄市の社会経済空間と都市整備』 横浜市立大学国際文化学部地理学教室
- * 城田愛 1997 「ハワイにおけるボン・ダンスの研究」 京都大大学院
- * 真玉橋元博 1992 「園田エイサーにみる、青年会活動と伝統芸能の継承についての考察」『地域文化の研究報告書』
- * 名嘉真宜勝 1968 「沖縄の若者制度」『民俗学評論 第3号』
- * 沖縄市企画部平和文化振興課 2000 『KOZA BUNKA BOX 第2集』 沖縄市役所
- * 沖縄市企画部平和文化振興課 1998 『ロックとコザ 改訂版』 沖縄市役所
- * 沖縄市観光協会 2001 『マングラズマガジン vol.8 エイサー特集』 沖縄市
- * 沖縄市総務部秘書広報課 2002 『広報おきなわ 2002年12月号』 沖縄市
- * 佐喜真興英 1925 『シマの話』 郷土研究社
- * 寺内直子 2000 「ハワイの沖縄系盆踊り」『沖縄文化 第36巻1号』
- * 久万田直子 1999 「エイサーの脈絡変化と伝播」『国内・国外派遣研究員研究報告書 第8号』 沖縄県人材育成財団
- * 小林公江 小林幸男 1997 「今帰仁エイサーの音楽」『沖縄芸術の科学 第9号』 沖縄県立芸術大学付属研究所

紀要

- * 仲本千秋 1994 「沖縄市におけるエイサーの現状と課題」 沖縄市立郷土博物館
- * 沖縄民俗芸能同好会 1996 「エイサーフォーラム」
- * 比嘉常俊 1986 『月刊 症候詩 第1号』

◆脚注◆

- (1) 沖縄本島・周辺島嶼の盆踊。旧暦7月15日の盆の夜、各戸がウークイ（精霊送り）をすませたころ、それぞれの村落の神アシャギの庭に集まり、円陣舞踊を奉納し、そのあと各戸を巡回する。『沖縄大百貨事典』 沖縄タイムス社（1983）340頁。
- (2) 「おもろ」とは、沖縄本島およびその周辺の古謡の称。元来が祭りの場や夜籠りの場などで口から耳へ語りうたい継がれた口承歌謡であったが、16世紀から17世紀にかけて、奄美・沖縄でうたわれた1553首が、3回にわたって首里王府でまとめられ、やがて、22巻の官撰『おもろさうし』が完成した。オモロの語義については「思う」の首里方言ウムルとするのが穏当であろう。『沖縄大百貨事典』 沖縄タイムス社（1983）75頁。
- (3) 主として明治中期から、学習や風俗改善を目的として組織された青年組織。明治中期は、市町村制や消防規則の制定により若者組の役割が減少するとともに彼らによる婚礼の妨害、祭礼に伴う酒食や賭事、宿や夜遊びにおける異性交遊などが識者から弊風と見なされ、その改良が求められるようになった。『日本民俗大辞典 上』 福田アジオ他編集（2000）930頁。
- (4) 全島エイサーまつりの前身、全島エイサーコンクールは、1956年コザ市商工会が発案し市と共催したものである。将来の街の発展に寄与する中部独特の年中行事として、角力や闘牛と併せて実施された。観客の地域配分が考慮され、コザ十字路・照屋商店街は角力、胡屋十字路センター通り・空港通りはエイサー、諸見大通りは闘牛を実施した。年を追うごとにエイサーコンクールは多くの観衆を引きつける一大イベントに成長していく。当時の新聞は第1回、第2回は約3万人、第3回は約6万人の観衆を集めたと報じている。回を重ねるごとに数万の観客に膨れ上がり、部落をあげての応援団も熱をあげてくるようになった。それにより、シマのエイサーの評価基準とコンクールの評価基準の衝突が激化したため、競い合いのない「まつり形式」へこのイベントを移行させていった。優勝の判定をめぐる審査員と青年会のトラブルが相次いだために1977年の第22回大会からコンクール制は廃止され、「沖縄全島エイサーまつり」と銘打って新たにこのイベントは出発することになる。つまり順位づけのない競演形式になって以来ショー化が進み、その様相は変化し、現在にいたる。2002年の「第47回沖縄全島エイサーまつり」も25万余の観衆を魅了し、今や、沖縄の一大イベントと言われるまでに成長し、沖縄の夏の風物詩としても定着している。
- (5) 沖縄県沖縄市は本島中部地区に位置し、1974年にコザ市と美里村が合併して「沖縄市」と名称変更し、県内第2の都市となった。嘉手納米軍基地を筆頭に中部地域の米軍・自衛隊基地の約3分の1が占有する沖縄市は、沖縄とアメリカ、そして日本の文化が入り交じった文化「チャンプルー文化」の街として知られている。現在でも「コザ」と呼ばれているこの地域は、様々な音楽や芸能などの発祥の地でもあり、「エイサー」の活動も盛んである。
- (6) 森香織（2000）「エイサーの継承をめぐる青年会の状況」『沖縄市の社会経済空間と都市整

- 備』、147 頁。
- (7) 照屋の旧本町通り（現、銀天街）一帯にあった特欽街のこと。センター通りが「白人街」と呼ばれたのに対しての呼称である。「木炭街」とも称され、民間人たちは黒人たちを「照屋青年団」と呼ぶこともあった。1950 年代の初めごろ形成され、外人相手の洋服店やバー、キャバレーなどが 80 軒ほど立ち並び、にぎわった。人種差別による外人同士のトラブルや暴力事件が頻繁にあった。『ロックとコザ 改訂版』 沖縄市企画部平和文化振興課（1998）、54 頁。
- (8) 同上書、147 頁。
- (9) 森前掲（2000）、148 頁。
- (10) 森前掲（2000）、151 頁。
- (11) 森前掲（2000）
- (12) 旧暦 7 月 16 日に行われる諸見里地域の行事。古くから伝わる諸見里の「旗」を先頭に、青年会エイサー、老人会、婦人会、子ども会が諸見里を練り歩く。それが終了すると、公民館において、獅子舞他、芸能が披露される。
- (13) 聞き取りは、2002 年 6 月 22 日に実施。
- (14) 聞き取りは、2003 年 1 月 14 日に実施。
- (15) 聞き取りは、2002 年 9 月 3 日に実施。
- (16) 「自分たちでやろう」という意味。
- (17) 「強く言うほうだから」
- (18) 沖縄県立芸術大学・久万田晋教授による名称。
- (19) 沖縄市広報誌 「広報おきなわ」 2002 年 12 月号より。
- (20) 市 TMO（タウン・マネージメント・オーガニゼーション）が商店街の空き店舗解消を図るために実施している事業。グランプリ賞金（開店準備金）100 万円と 1 年間、店舗と住宅の家賃補助が行われる。
- (21) 沖縄市商店街通りのひとつ。中央パークアベニューと一番街を結ぶ通り。
- (22) 「休みに」の沖縄方言。
- (23) 聞き取りは、2002 年 9 月 5 日に行った。
- (24) 1998 年（平成 10 年）にオープンした「コリンザ」という複合施設内にある約 300 席の小劇場。
- (25) 「赤ふんどし」の沖縄方言。
- (26) 2002 年 8 月 1 日付け琉球新報朝刊記事より。
- (27) 2002 年 8 月 1 日付け沖縄タイムス朝刊記事より。
- (28) 沖縄のお祝いの席にて即興で踊られる踊り。決まった型はなく、感情の向くまま曲に併せて、両手を前後左右に自由自在に振る。エイサーまつりや結婚式のフィナーレ等で、締めくくりとして参加者全員で踊られる。
- (29) 森前掲、172 頁。

■表 1 平成14年度沖縄市青年団協議会活動表■

月	日	市青協主催行事	備考	日	他組織協力事業	備考
3月				8(金)～	上原清善杯チャリティーボーリング協力	～4/7まで
	2(火)	4月度定例会		21(日)	中青協総会	
4月	7(日)	市青協野球大会		26(金)～28(日)	全国エイサー道じゅねーin札幌	越来青年会
	27(土)	大底まことデビュー1周年ライブ				
5月	7(火)	5月度定例会		24(金)～26(日)	全国エイサー道じゅねーin広島	登川青年会
	19(日)	平成14年度市青協定期総会				
6月	4(火)	6月度定例会			各地域エイサー練習開始	
	2(火)	7月度定例会		7(日)	一番街商店街出演	1団体
7月	30(火)	エイサーシンポジウム		21(日)	風山祭(山内中学校区)	
				26(金)～28(日)	全国エイサー道じゅねーin東京	胡屋青年会
					エイサー教え隊派遣(山形県米沢市)	園田青年会
8月	3(火)	全国エイサー大会		18(日)	沖縄全島子供エイサーまつり出演	2団体
	4(日)	エイサー道じゅねー		18(日)	プラザハウス出演	2団体
	6(火)	8月度定例会		21(水)～23(金)	各地域旧盆エイサー奉納	
	31(土)	第24回沖縄市青年まつり	市内10団体			
	3(火)	9月度定例会		1(日)	第47回沖縄全島エイサーまつり	
				7(土)～9(月)	北海道函館昆布フェスタ	知花青年会
9月				13(金)～16(月)	全国エイサー道じゅねーin福岡	園田青年会
				14(土)～16(月)	東京都町田フェスタ	諸見里青年会
				19(木)	国際カーニバル資金造成ゴルフ	4組
				26(木)	交通安全協会資金造成ゴルフ	3組
				29(日)	かりゆしエイサーまつり(登川区)	市内8団体
10月	1(火)	10月度定例会		10(木)	那覇駐屯地30周年コンサート出演	1団体
	27(日)	グラウンドゴルフ大会		12(土)～14(月)	石川県小松どんどんまつり	山里青年会
				21(月)～25(金)	国際カーニバル網作りの応援	5日計10団体
				31(木)～3(日)	中頭地区青年国内研修への派遣	2名
	5(火)	11月度定例会		3(日)	沖縄国際カーニバル	9団体
	9(土)～10(日)	沖縄市青年リーダー研修会	55名参加	10(日)	クリーン・デイン沖縄市への参加	各地域にて
	19(火)	臨時定例会	次年度派遣等	13(水)、20(水)	笑築歌劇団の舞台演舞	園田4名
11月				22(金)～24(日)	沖縄市工芸フェアへの協力	
				24(日)	ゲート2フェスタへの協力	
				24(日)	沖縄市老人クラブ大運動会への参加	各地域にて
					エイサー教え隊派遣(東京都町田市)	諸見里青年会
12月	3(火)	12月度定例会		8(日)	子どもの国ユカリ刈りボランティア	20名
	15(日)	クレイジーパーティー		22(日)	大琉球まつり王国への出演	5団体
	6(月)	沖縄市新年祝賀会への参加				
	7(火)	1月度定例会				
1月	12(日)	沖縄市成人式典の協力及び運営				
	23(木)	人材育成事業パソコン研修①				
	30(木)	人材育成事業パソコン研修②				
	4(火)	2月度定例会		16(日)	おきなわマラソンボランティア	
	6(木)	人材育成事業パソコン研修③				
2月	9(日)	第2回市青協祭				
	13(木)	人材育成事業パソコン研修④				
	20(木)	人材育成事業パソコン研修⑤				
	27(木)	人材育成事業パソコン研修⑥				
3月	4(火)	3月度定例会				
	6(木)	人材育成事業パソコン研修⑦				
	13(木)	人材育成事業パソコン研修⑧				
	20(木)	人材育成事業パソコン研修⑨				

※役員会は毎月最終週の水曜日に行う

■表2 日本列島縦断エイサーキャラバンスケジュール■

都市	日 程	派遣青年会	会 場
札 幌	4 / 27 ~ 28	沖縄市越来青年会	丸井札幌本店、市内各地
熊 本	5 / 11 ~ 12	宜野湾市宜野湾区青年会	市内各地
広 島	5 / 25 ~ 26	沖縄市登川青年会	福屋広島駅前店、市内各地
仙 台	6 / 1 ~ 2	糸満市武富青年会	藤崎百貨店、市内各地
大 阪	6 / 8 ~ 9	与那城町屋慶名青年会	阪神百貨店、市内各地
名古屋	6 / 22 ~ 23	北谷町栄口青年会	名古屋三越栄本店、市内各地
郡 山	6 / 22 ~ 23	具志川市赤野青年会	うすい百貨店、市内各地
松 山	6 / 29 ~ 30	名護市青年団やんばる船	市内各地
岡 山	7 / 12 ~ 13	嘉手納町千原エイサー保存会	市内各地
神 戸	7 / 14	嘉手納町千原エイサー保存会	市内各地
東 京	7 / 27 ~ 28	沖縄市胡屋青年会	伊勢丹新宿本店、市内各地
金 沢	8 / 3 ~ 4	南風原町津嘉山青年会	市内各地
新 潟	9 / 7 ~ 8	読谷村座喜味青年会	新潟伊勢丹、市内各地
福 岡	9 / 14 ~ 15	沖縄市園田青年会	市内各地
青 森	9 / 28 ~ 29	勝連町平敷屋青年会	市内各地

■表3 沖縄市エイサーマンズリーイベント日程■

日 付	イ ベ ント	場 所	備 考
7月20日(土)	エイサー資料展 エイサー体験	エイサー会館 パルミラ通り	海の日
7月21日(日)	風山祭	山内中学校	山内地区
7月30日(火)	エイサーシンポジウム	沖縄市民小劇場あしびなー	
8月3日(土)	全国エイサー大会	沖縄市野外ステージ	
8月4日(日)	エイサー道じゅねー	胡屋地区周辺	
8月7日(水)	エイサー体験	エイサー会館	観光週間
8月11日(日)	エイサー道じゅねー予備		
8月18日(日)	沖縄全島子どもエイサーまつり	農民研修センター	
8月21日(土) ~23日(金)	旧盆エイサー道じゅねー	市内各地	旧盆
8月31日(土)	沖縄市青年まつり	市陸上競技場	前夜祭
9月1日(日)	沖縄全島エイサーまつり	市陸上競技場	市主催
9月22日(日)	かりゆしエイサーまつり	農民研修センター	登川地区

■表4 平成14年度県外派遣イベント及び青年会■

日 付	派遣イベント名	派遣青年会	人数	主 催
4月26~29日	全国エイサー道じゅねー(札幌)	越来青年会	30	沖縄県
5月24~27日	全国エイサー道じゅねー(広島)	登川青年会	30	沖縄県
7月26~28日	全国エイサー道じゅねー(東京)	胡屋青年会	30	沖縄県
9月7~9日	函館昆布フェスタ	知花青年会	10	函館市
9月13~15日	全国エイサー道じゅねー(福岡)	園田青年会	30	沖縄県
9月14~16日	町田エイサー祭り	諸見里青年会	45	町田市
10月12~14日	小松どんどん祭り	山里青年会	20	小松市

○ 執筆者

- 大 谷 勉 高田爬虫類研究所沖縄分室
郷土博物館協議会委員
- 喜屋武 優 子 (株)沖縄環境保全研究所
- 比 嘉 正 一 (有)東南植物楽園学芸員
郷土博物館協議会委員
- 与那嶺 江利子 沖縄市立中央公民館
郷土博物館友の会会員
- 比 嘉 清 和 郷土博物館学芸員
- 川 副 裕一郎 郷土博物館学芸員

あやみや 第13号

発行年月日/平成17年(2005年)3月31日

編集発行/沖縄市立郷土博物館

〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6 TEL (098) 932-6882

印 刷/刷(有)曙印刷

〒904-2172 沖縄県沖縄市泡瀬4-31-15 TEL (098) 938-7884

沖縄市立郷土博物館紀要第13号

あやふや

2004年

沖縄市立郷土博物館

あやみや

第 13 号

も く じ

リュウキュウヤマガメ
〔過去 5 年間の調査より〕

大 谷 勉 (1)
喜屋武 優 子

沖縄島の蝶類食草について
—1992年からの記録から—

比 嘉 正 一 (17)

沖縄市東部の電力供給とラジオの普及について

川 副 裕一郎 (29)

沖縄市池原で確認されたシシ穴の概要について

比 嘉 清 和 (36)

エイサーにみる青年会活動とその展開

与那嶺 江利子 (42)

本誌のタイトルに付された「あやみや」という言葉は『おもろさうし』から引用したもので「美しい庭」の意味をもつものです。調査研究のみならず博物館の活動が、美しい庭のように多くの花が咲き誇ることを願って命名されています。